



桃山学院教育大学 教育学部教育学科 講師

オチャンテ・村井・ロサ・メルセデスさん

私たちは、第34回近畿弁護士会連合会大会で「外国につながる子どもたちの夢の扉を開こう!～自己実現を可能とする教育環境の整備に向けて～」というテーマでシンポジウムをすることになり、その準備の中でオチャンテさんとお会いしました。

経歴について

—— まずは、オチャンテさんの来歴についてお話しいただけますか。

私は日系ペルー人で、23年前に15歳で来日しました。両親が1991年に結婚して日本に来て、それは2～

3年のつもりだったので、私と兄と弟の3人兄弟は祖父母と一緒にペルーで生活していました。でも、2年～3年のつもりが、気づいたら5年になり、父はある程度日本の生活にも慣れていたし、仕事だけではなくて、音楽が大好きで、アンデスのサンポーニャを

使ったフォルクローレのバンドを組んで学校に行ったり、異文化理解推進の活動もしたりしていたので、もう少し日本にしようということで子どもを呼び寄せることになりました。私たちは、両親の来日から5年後の1996年12月末に来日しました。

私が15歳、兄が16歳、弟は6歳で、日本語は全くできない状態で日本に来て、私は中学校、弟は保育園に入りました。兄はもう超過年齢だったので、最初は私の付き添いという名目で、中学校で日本語の勉強をしていました。私も兄も中学校に通ったのは、わずか2か月だけですが、卒業後には高校に進学したいという思いがありました。当時の中学校の校長先生が超過年齢にもかかわらず兄の入学も認めてくれ、私と兄と一緒に卒業することができました。私も兄も日本語の学習をしたのはわずか2か月に過ぎず、十分に言葉が分からず、全日制の高校に通うのは難しいので、選択肢としては定時制高校がありましたが、入学できるかは分からないという感じでした。しかし、そこでも当時の中学校の校長先生と定時制高校の校長先生の理解と協力があって、日本語は分からないけれども勉強したいという気持ちを認めていただき、兄と一緒に定時制高校に進学することができました。実際に、日本語を学んだのは定時制高校です。

—— **高校卒業後、オチャンテさんは大学に進学されたんですね。**

はい。高校を卒業してすぐ仕事というのは全く考えていなくて、大学に進学したいという思いがはっきりしていました。

高校卒業当時は、日本語も3年目、4年目ぐらいですので、話はできませんが、文章を書くなどは難しく、学力的にも厳しいと言われていました。

しかし、当時の日本語の先生やサポートで教えていただいていた先生に、いろいろな大学の入試制度を調べもらい、宗教がカトリックで、私の学びた

かった心理学を専攻できる京都ノートルダム女子大学を勧めてもらい、無事に入学することができました。

—— **現在の社会心理学という専門分野にはどのようにしてたどり着きましたか？**

入学当初は、心理カウンセラーになることを考えていました。しかし、大学のときに、私と同じようなニューカマーの子どもたちの教育のボランティアに行っていて、子どもたちが日本語の勉強だけではなく、家族との関係など、様々なことで悩んでいるんだなということに改めて気づきました。

そこで、私も、このような子ども達の力になれるような研究がしたいと思い、社会心理学の研究をはじめました。

現在の活動について

—— **今回のシンポジウムの準備の際に、ニューカマーの方で努力をして大学で教えているすごい人がいるということでオチャンテさんの名前が挙がり、連絡を取らせていただきました。ニューカマーの子どもたちは日本でどんどん増えています。外国につながる子どもの高等学校への進学率は、日本人だったら98.8%のところ63%しかない。大学進学率となるとさらに低い中で、オチャンテさんが前向きに勉強や研究をし、大学の講師を務めるまでになれた秘訣は何でしょうか。**

早く目標をつくれたことだと思います。大学に行きたい、こういうふうになりたいと、自分のなりたいものを早い段階でイメージすることができたのが大きかったと思います。

外国につながる子どもたちは、日本においてはマイノリティであり、輝く機会がなかなかないと思うんです。ことばにもハンディキャップがあり、授業についていけず、できない自分に自尊心も大きく傷つきますし……。

でも、自分が何かできる得意なものがある、例えば英語が得意で、「発音がきれい」と周りに褒められるなど、何か強みを持てる子どもたちがどんな次のステップに進んでいるんだということに、いろいろな子どもたちの話を聞いて気づきました。

私も、大学に行きたいという目標を高校に入学する前には持っていたことが大きかったと思います。

高校や大学を中途退学した外国につながる若者は、退学の理由として、経済的な理由を挙げる子たちが多いのですが、実は、これに「学校の勉強についていけなかった」や「サポートがなかった」という理由が重なっていることが多いと感じます。1つの理由だけではないんです。

また、高校生になってくると保護者の年齢もどんどん上がっていったら、50代の両親が工場でくたくたになるまで働いているのを見ると、やっぱり自分も早く働かなきゃいけないと思う若者は多いです。

外国につながる子どもの両親やまわりの親戚などは、非正規雇用でブルーカラーの仕事をしているなどの不安定な労働環境にすることが多いです。

周囲が「時給いくら」という生活をしていて、またその生活する限られた地域から出ないことが多く、日本人について、外国に対してよい印象を持っていない特定の地域住民や

両親の雇用主のイメージしか持っていない子どももいます。

自分で学んで、外の世界に出て、視野を広げれば、広い考え方をを持った日本人や、外国が大好きな日本人もたくさんいるんだということに気づきます。このことに気づかないまま孤立してしまうのは本当に残念なので、子どもたちにはもっといろいろな人と出会って世界をよく見てほしいと思います。

外国につながる子どもが日本で暮らしていく中で、いろいろな可能性があるんだよということを子どもたちが小さい頃から示すことは、非常に重要だと思います。

—— 今回のシンポジウムを開催するに当たって実態調査をすると、教育委員会や教育現場が努力して、ポジティブ・アクションの一種として特別枠入試制度を設け、これを外国につながる中学生に分かりやすく説明したり、ロールモデルとなる先輩と話ができたりする機会を設けておりまして、徐々に高校進学率自体は向上しているかなとも感じのですが、いかがですか？

確かに高校の進学率は上がってきています。

しかし、その後のサポートはまだ不十分なところもあり、進学しても、中途退学が多い現実もあります。

さらに、高校卒業後の進路として、大学とか専門学校の学費が高く、奨学金も限られ、勉強したくてもすぐにはできず、そのまま諦める若者も多いです。また、高校卒業後の進路やキャリア支援の情報が受けられないと、学ぶことの意義を見出せない

子どもも少なくないです。そのため、大学進学率は未だに低いです。

—— シンポジウムの前夜の会議では、パネリストの皆さんで集まってたくさんお話をしました。皆さん、外国につながる子どもの教育の分野では第一人者といえる方ばかりです。その会議では、シンポジウムは翌日なのに、本番さながらの熱い議論が交わされましたが、皆さんが口を揃えておっしゃっていたのが、「オチャンテさん」を増やさないとだめなんだよということです。オチャンテさんのように日本で活躍する外国につながる若者が増えるような日本社会でなくてはなりませんね。

大学に行ったからといって必ずし

も幸せになるわけでもないと思いますが、せめて高校まで行こうということを若者に伝えていきます。

私は、本当にたまたま運なのか、恵まれているのか、今まですごくいい出会いをしてきました。

私は、大学1年生のときから京都ノートルダム女子大学の学長先生（当時）の縁で、箕面市にある「大阪ラテンアメリカの会」というNGO団体にかかわることができました。今はその団体の副会長をしています。そこでは日本語の算数ドリルをスペイン語に訳して、それをペルーで印刷をして、学校に毎年3,000部配付しています。あと、子どもたちが使っていないきれいな絵本を寄附として





送るのですが、スペイン語の訳をシールにして絵本のあいているところに貼って、ペルーだけでなくパラグアイ・メキシコ・ボリビアなどの子どもに送っています。

その学長先生とは今までずっとつながりがあり、そこから大学関係の仕事に携わることになりました。また大学院のときから、三重大大学の教員と研究の協力をしたり、ボランティアや現場での経験をもとに、学会発表や論文を出したりしてきました。

これらの活動が認められて、大学の助教のポストに就くことができましたし、助教として呼ばれた講演会でその会場にいた方から、また別の講演会に呼んでいただいたりして、現在までどんどん活動の幅が広がってきました。

—— オチャンテさんのお人柄は素晴らしく、オチャンテさんにお会いされた方々がファンになるのが分かります。弁護士会も、今回のインタビューも含めてたくさんのお願いをしています。シンポジウムも外国の子ど

もに携わろう、この現状を何とかしようと考えて協力してくださったことに感謝しています。ほかのパネリストの皆さんの知識の深さやお人柄も素晴らしく、一緒に活動させていただいてとても楽しかったです。

楽しかったですね。皆、仕事でやっているわけではなくて、使命だというような思いでされているのだと思います。私は、外国につながる子どもだけじゃなくて、日本人の子どもたちも、もっといろいろな人と出会って世界をよく見てほしいなと思います。いろいろな外国につながる人がいるのだということも知ってほしいので、学校に行ったり異文化理解の講演をさせていただいたりしています。少しでもお互いの違いを受け入れ合うような社会になってほしいと思います。

地元・伊賀について

—— オチャンテさんはあらゆるところから引っ張りだこで、あちこちに行かれたりしている一方、最初に来た町である伊賀のこともすごく大

切に思っているんじゃないですか。伊賀にはどういう思いを抱いているんじゃないですか。

今、日本では地域によっていろんな格差があると思いますが、私は伊賀に来たから今の自分があるんだなと思っています。

例えば日本語が分からないからといって、まったく受け入れてもらえていなかったら、私は多分ペルーに帰っていたかもしれないです。ですが、伊賀では、私や兄が、進学できるように学校の扉をあけてくれました。また、今でも支えてもらっている素晴らしい地域の仲間がいます。

父は4年前に亡くなったのですが、父も伊賀のことが大好きで、自分は伊賀人だといつも言っていました。

生まれはペルーで15歳まで生活していたけれども、自分が大人になったのは伊賀で、実家があるのもやっぱり伊賀なので、地元として誇りに思っています。

子どもたちのことを真剣に考えている教員もたくさんいて、大学に進

学したり夢を実現したりしている外国につながる子どもたちも多いので、伊賀のようなまちがもっと増えて、どこに行っても同じような支援体制ができるといいなと思います。

—— オチャンテさんが、「日本は『帰る場所です』というふうにシンポジウムでおっしゃっていたことが、とてもうれしかったです。

これから、外国につながる子どもはどんどん増えて行くと思いますが、多くの子どもが、日本は素晴らしい、と感じながら成長する日本社会であってほしいと思います。

今どんどん移民の2世の子どもたちや、日本しか知らない子どもたちが増えています。また、私みたいに大きくなってから日本で育っていくことになる子どもも増えていくでしょう。やっぱりこの国に来てよかったなと思えるような日本にしたいと思っています。

地域の大人には、「外国の子ども」ではなく、地域の子どものだと思ってほしいです。

外国につながる子どもは、日本語が分からないことでいろいろな緊張感もあるし、ちょっとした周囲の目線や表情でも「外国人だから変な目で見られたかな」と不安になります。でも、例えば「こんにちは」「元気？」とやさしく声をかけてくれるだけで、外国につながる子どもたちも地域の人から受け入れられていると感じることができ、すごくほっとするんです。

外国につながる子どもが受けたいじめや差別の話を聞くと、友達から「うちのおじいちゃんは外国人が嫌い

だから一緒に帰らない」と言われた、などのエピソードが出てきます。そのような差別表現は大人が発言するから子どもが真似をして使うと思います。

「どこの国の子ども」ではなく、「地域の全ての子ども」という視点で子どもに接してほしいと感じます。

弁護士との協働について

—— 今回は私たちと一緒にシンポジウムを盛り上げていただきましたが、弁護士会あるいは弁護士に対する印象についてはいかがですか。

私、弁護士の方たちとお話する機会が今までなかったので、最初電話をいただいたときに驚いたのですが、実際に話してみると、いろいろな経験をされている方たちばかりで、本当に外国につながる子どもをとりまく現状を変えなきゃという思いがすごく伝わってきました。それで私も是非このシンポジウムに協力したいという気持ちになりました。

また、何回かお話をするうちに、本当に楽しそうにされていて仲間意識を感じました。弁護士としてのお仕事が大変だということもありながら、こういう活動をやろうとされていることはすごいということをほかのパネリストの方たちとも話をしていました。

私が当事者として語ることができるところはあるけれども、やっぱりできることは範囲が限られていて、状況を訴えることまでしかできないということもあると思うんです。でも、これが私の使命だと思ってどんどん

声を上げています。

この分野には、法律のことを知っている方たちが使命としてやらなければならないこともあると思うし、それを本当に子どもたちのことを考えてやっている皆さんがいるということに敬意を払い、これからも一緒に活動したいと思っています。

シンポジウムにはその熱い思いを1日中でも語れるようなすごい人たちが集まって、みんないろいろなことはやっているけれども、多分皆さんの目標というのはまさに「夢の扉を開こう！」であって、みんな同じ方向に向かっているんだなとすごく感じました。

だから、最終的にまとまった素晴らしいシンポジウムになったと思います。

これで終わりではなく、実際に全ての子どもたち、全ての地域の子どもの子どもたちが自己実現できるように、これからまだまだ課題は多いけれども、皆さんと出会ったこの縁をこれからも何らかの形で大事にしたいと思っています。また、私分からないことに協力していただきたいと思います。

—— 先日のシンポジウムが外国につながる子どもたちの夢の扉を開く第一歩になるといいなと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

よろしくお願いいたします。

—— 本日はありがとうございました。

(インタビュー: 夏目麻央)
(写真撮影: 高広信之)